

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	西 牧 史 洋
論文審査担当者	主 査 野見山 哲生 教授 副 査 杠 俊介 教授 ・ 中沢 洋三 教授
論文題目	Relationship Between the Quantity of Oral Candida and Systemic Condition/Diseases of the Host :Oral Candida Increases with Advancing Age and Anemia (口腔カンジダ菌量と宿主の全身状態/疾患との関係：口腔カンジダ菌は加齢および貧血の進行とともに増加する)
(論文の内容の要旨)	<p>〔背景と目的〕 カンジダ菌は、共生真菌生物ならびに粘膜組織の日見病原体である。カンジダ菌は習慣的に口腔内に存在し、そして多くの全身のおよび局所的要因により口腔内のカンジダ菌が増加すると言われている。しかしながら、口腔カンジダ菌の増加に対する宿主の全身状態/疾患の影響は不明のままである。本研究の目的は、口腔カンジダ菌量と宿主の全身状態/疾患との間に関連性があるかについて調査検討することである。</p> <p>〔方法〕 長野県安曇野市および塩尻市で国保特定健診を受けた 30 歳以上の 1,935 人中から無作為に抽出された 563 人 (261 人の男性と 302 人の女性) が本研究の対象者となった。口腔内のカンジダ菌量はうがい液をサンプルに、カンジダマンナン抗原濃度を測定して計測した。カンジダマンナン抗原濃度と特定健診結果との関連を統計学的に分析した。</p> <p>〔結果〕 カンジダマンナン抗原濃度は、単変量解析において、年齢 ($p < 0.01$)、未処置のう蝕歯数 ($p < 0.01$)、義歯の数 ($p < 0.01$)、唾液の pH ($p < 0.01$)、HbA1c ($p < 0.05$)、および、赤血球数 ($p < 0.01$) と相関していた。多変量解析結果では、年齢 ($p < 0.01$)、未治療の虫歯の数 ($p < 0.01$)、補綴歯数 ($p < 0.01$)、唾液の pH ($p < 0.01$)、および、赤血球数 ($p < 0.01$) は、カンジダマンナン抗原濃度を左右する独立因子であった。カンジダマンナン濃度は 80 歳以上、未治療または補綴歯数が多い、唾液 pH が低い、赤血球数が少ない者で高かった。また、カンジダマンナン濃度は、HbA1c が上昇した者においても高い傾向を認めた。</p> <p>〔結論〕 本研究の結果より、口腔カンジダ菌量と宿主の全身状態/疾患との間に密接な関係があることを示唆された。口腔カンジダ菌は宿主の免疫能低下で増加する可能性が示された。</p>